

熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

藤井 15/01/30

## 熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

## 目次

1. はじめに
2. 熱伝達の境界条件 (fixedAlphaTemp) の作成
  - 2-1. 考え方
  - 2-2. fixedAlphaTemp の作成
3. 作動確認
  - 3-1. モデルの作成
  - 3-2. solver
  - 3-3. 境界条件
  - 3-4. 計算結果の確認
4. 計算結果の検証
5. まとめ

## 1. はじめに

現在、OpenFOAMでlaplacianFoamを使って、熱伝導の計算ができる状態にあるが、これは熱伝導のみで熱伝達の計算ができない状態にある。商用の構造解析ソフトで熱伝導を計算しようとした場合、熱伝達の計算ができる。この為、OpenFOAM側でも熱伝達の計算ができる様に、この境界条件を作成してみる。

## 2. 熱伝達の境界条件 (fixedAlphaTemp) の作成

## 2-1. 考え方

熱伝達は、固体表面とその固体周りの流体側との熱移動を計算する。その流体側に熱移動する熱量は、下式で表される。

$$\mathbf{q} = \alpha(T - T_{ref})$$

$q$ : 熱流束 (W/m<sup>2</sup>)  
 $\alpha$ : 熱伝達率 (W/m<sup>2</sup>.K)  
 $T$ : 固体表面温度 (K)  
 $T_{ref}$ : 流体側の温度 (K)

また、固体側の熱伝導は、下式で表される。

$$\mathbf{q} = -\lambda \cdot \nabla T$$

$q$ : 熱流速 (W/m<sup>2</sup>)  
 $\lambda$ : 熱伝導率 (W/m.K)  
 $T$ : 固体温度 (K)

OpenFOAMは、温度を変数として、温度の方程式を解いている為、熱伝達を計算する為には、固体表面から温度差に応じた熱量を加減算死求める事になる。この計算をする為には、固体表面に固体の温度勾配 ( $\nabla T$ ) を設定する事で求める事ができる。以上の理由により、上式を変形して、下式で計算する事になる。

$$\mathbf{q} = -\lambda \cdot \nabla T = \alpha(T - T_{ref})$$

$$\nabla T = \frac{\alpha}{\lambda}(T_{ref} - T)$$

## 熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

上式で算出した温度勾配を境界条件として設定すれば、計算できる事になる。

この温度勾配を計算する為に、境界条件の入力フォーマットとして、以下の内容で値を入力し、温度勾配を計算できるものを作成してみる。

```

type fixedAlphaTemp;           //patchType
refTemp 300;                   //参照温度 (雰囲気温度)
alphaH 250;                    //熱伝達係数
KField_or_KValue KField;      //熱伝導率λを field で読むか値で読むかを決定
KField lambda;                //field で読む場合の field 名
KValue 30;                     //値で読む場合の値
gradient uniform 0;           //温度勾配 Field の定義
value uniform 300;            //温度の初期値

```

### 2-2. fixedAlphaTemp の作成

OpenFOAM に標準で備わっている境界条件「fixedGradient」を改造して新しい境界条件「fixedAlphaTemp」を作成する。

元々のソースコード「\$WM\_PROJECT\_DIR/finiteVolume/fields/fvPatchFields/basic/fixedGradient」を「\$WM\_PROJECT\_USER\_DIR/applications/libraries/myBCs/」にフォルダ毎コピーする。

コピー後、FOAM 端末上から以下を入力して、ファイル名と境界条件名を一括変換する。

```

$ cd $WM_PROJECT_USER_DIR/applications/libraries/myBCs/fixedGradient
$ rename 's/fixedGradientFvPatchField/fixedAlphaTempFvPatchScalarField/g' */*
$ sed -i 's/fixedGradientFvPatchField/fixedAlphaTempFvPatchScalarField/g' */*

```

オリジナルの fixedGradient は、field の型が scalar、vector などの型でも使う事ができるが、今回の場合、熱伝達の計算のため、field の型を scalar に固定している。この方法は、修正箇所が増えるが、field 間の演算が楽になる。

修正方法は、基本的に以下で修正し、コンパイルが通る事を確認しておく。

- (1) template 文は全て削除
- (2) public fvPatchField<Type> → public fixedGradientFvPatchScalarField  
この変更により、全ての「fvPatchField<Type>」が「fixedGradientFvPatchScalarField」に変わることになる。  
ただし、「tmp<fvPatchField<Type> >」部は、「tmp<fvPatchScalarField>」に変える。
- (3) TypeName("fixedGradient") → TypeName("fixedAlphaTemp")  
この変更により、境界条件名が「fixedAlphaTemp」に変わる。
- (4) Type → scalar に変更  
この変更により、field の型が scalar に固定される。
- (5) \*\*\*.H ファイルに include を追加  
#include "fixedGradientFvPatchFields.H"
- (6) \*\*\*.C ファイルに include を追加  
#include "addToRunTimeSelectionTable.H"  
#include "fvPatchFieldMapper.H"  
#include "volFields.H"
- (7) \*\*\*.H ファイルの最後の行をコメントアウト  
//#ifdef NoRepository  
// include "fixedHeatTransferFvPatchScalarField.C"  
//endif
- (8) \*\*\*.C ファイルに境界条件を db に登録する手続きを追加

コンパイルする為の Make フォルダ内の files と options ファイルの内容は以下で設定して、コンパイルする。

-----files の内容-----

熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

```
./fixedAlphaTempFvPatchScalarField.C //コンパイルの対象
LIB = $(FOAM_USER_LIBBIN)/libFixedAlphaTemp //ライブラリ名
-----
```

```
-----optionsの内容-----
```

```
EXE_INC = \
  -I$(LIB_SRC)/finiteVolume/lnInclude \
  -I$(LIB_SRC)/triSurface/lnInclude \
  -I$(LIB_SRC)/meshTools/lnInclude
LIB_LIBS = \
  -lOpenFOAM \
  -ltriSurface \
  -lmeshTools
-----
```

コンパイルが通る事を確認した上で、fixedAlphaTemp.H、fixedAlphaTemp.C ファイルに以下の修正を加える。(ここでは、代表的な部分のみ記載。詳細は、ソースコードを参照。)

```
-----fixedAlphaTemp.H-----
```

```

:
// Evaluation functions

//追加-----
//- Update the coefficients associated with the patch field
virtual void updateCoeffs();
//-----

//- Return gradient at boundary
//virtual tmp<Field<Type> > snGrad() const
virtual tmp<Field<scalar> > snGrad() const
{
    return gradient_;
}
:
-----
```

```
-----fixedAlphaTemp.C (処理部を追加) -----
```

```

:
//追加-----
void Foam::fixedAlphaTempFvPatchScalarField::updateCoeffs()
{
    if (this->updated())
    {
        return;
    }
    //変数定義
    Field<scalar> flowHeat;
    //Field<scalar> intVal = this->patchInternalField();
    const fvPatchField<scalar>& patchValue = *this;
    if (KName_or_KValue_ == "KField")
    {
        // Tの境界条件に lambda field の値を読んで設定する為、
        // solver 側の createField で field を定義する順番は、先に lambda、その後Tを定義する
        // lambda と T の定義する順番を間違えると「region0 内に lambdaField が無い」のエラーが

```

### 熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

```

// solver 実行時に発生する。
const fvPatchField<scalar>& lamp =
    patch().lookupPatchField<volScalarField, scalar>(KName_);
//flowHeat = (refTemp_ - intValue) * alphaH_ / lamp;
flowHeat = (refTemp_ - patchValue) * alphaH_ / lamp;
}
else
{
    //熱伝導率を値で取得する場合
    //flowHeat = (refTemp_ - intValue) * alphaH_ / KValue_;
    flowHeat = (refTemp_ - patchValue) * alphaH_ / KValue_;
}
gradient_ = flowHeat;
fixedGradientFvPatchScalarField::updateCoeffs();
}
//-----
//template<class Type>
void Foam::fixedAlphaTempFvPatchScalarField::evaluate(const Pstream::commsTypes)
{
    if (!this->updated())
    {
        this->updateCoeffs();
    }
    :
}
-----

```

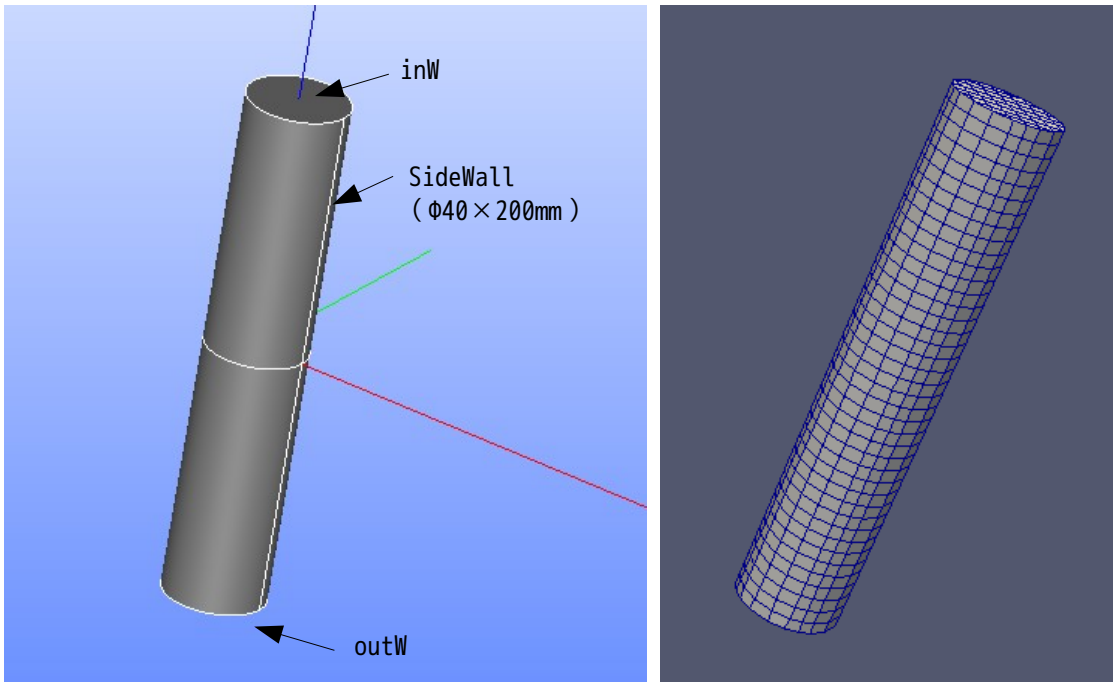
### 3. 作動確認

境界条件「fixedAlphaTemp」を作成する事ができたので、ここで作動確認してみる。

#### 3-1. モデルの作成

モデルは、単純に一次元で計算できる様に丸棒 (φ40×200mm) とし、モデル全体に初期値を与え、丸棒の片側の端面に熱伝達率を設定し、それ以外の面は、zeroGradientとして熱の出入りが無い状態で確認する。

## 熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)



メッシュは、要素サイズ 5mm でメッシュを切っている。

### 3-2. solver

使用する solver は、laplacianFoam で計算する。

### 3-3. 境界条件

境界条件は、以下で設定した。

```

patch 名      T
-----
internalField 400
inW           zeroGradient
outW          fixedAlphaTemp
sideWall      zeroGradient

```

fixedAlphaTemp の内容は以下で設定している。

```

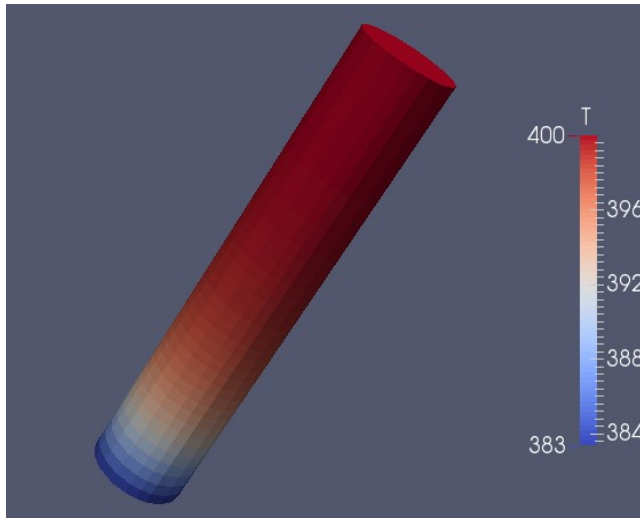
type fixedAlphaTemp;
refTemp 300;           // 雰囲気温度
alphaH 250;           // 熱伝達率
KField_or_KValue KValue; // KValue データで計算
KField lambda;
KValue 52.8;
gradient uniform 0;
value uniform 300;

```

### 3-4. 計算結果の確認

## 熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

10 秒間隔で 100 秒まで計算させた。100 秒後の結果が下図になる。



100 秒後の outW 端面側の cell の温度が 383K まで下がっている事になる。100 秒後で outW の端面に設定されている温度勾配は、395K/m が設定されていた。

### 4. 計算結果の検証

同じモデルを同条件で ANSYS で解析してみる。

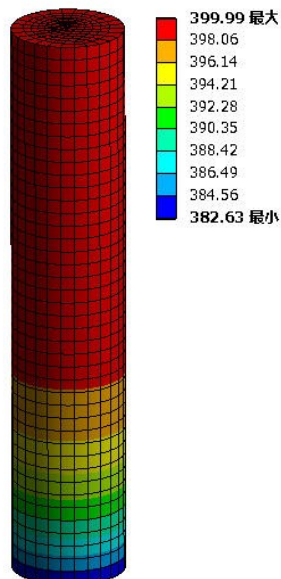
この結果が、以下になる。熱伝達面の最低温度が、「382.63K」であり、誤差は 1K 以下に収まった。

ANSYS の場合は、メッシュサイズ 5mm で OpenFOAM と同じだが、2 次メッシュで計算しているのので、OpenFOAM 側でその半分のメッシュサイズ (2.5mm) でメッシュを切り、結果を確認すると、誤差は 0.4K まで縮まっている。

ANSYS は有限要素法、OpenFOAM は有限体積法で解法の差がある為、誤差は生じてくる。

有限要素法：節点の値を求める

有限体積法：要素中心の値を要素に流れこむ flux から求める



熱伝達の境界条件 (OF-2.1、OF-2.3)

## 5. まとめ

今回、ANSYSで行う熱伝達解析を OpenFOAM で置き換える為には、OpenFOAM には無い熱伝達の境界条件を作成する必要があったが、これが作成でき誤差も少ない事が判った為、OpenFOAM に置き換える事ができる。現在の境界条件は、以下が存在するので、これを組み合わせて熱解析を行うことになる。これらの境界条件を温度 T field に設定する事になる。

- 熱伝達 : fixedAlphaTemp で熱伝達率を固定
- 熱流束固定 : fixedGradient で温度勾配を固定 (熱流束  $q = -\nabla T/\lambda$  で与える)
- 温度固定 : fixedValue で温度固定
- 熱絶縁 : zeroGradient で熱的に絶縁する